
マフラーと交換

神威ガン s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マフラーと交換

【Zマーク】

Z9539D

【作者名】

神威ガング

【あらすじ】

幼馴染とツンデレ系少女の話です。幼馴染がマフラーを作つてくれたが、恥ずかしさでどちらも素直になれず結局マフラーと交換となつた。

「ひょっと待つてよ。歩くの早いって
「別についてこいなんて言つてないんだが」「
「ちょっと待つてつて。どうせ同じとこ行くんだし、いいじゃない」「
「別に居るのは構わない。が、なんで俺がお前のペースに合わせな
きやいけないんだよ」

と、言つて後藤くんはスタスターと歩いて行ってしまった。

「ちょっと。待つてよ」「

「お前を待つてたら学校に遅刻するだろ?」「

後藤のくせに何よ、その言い方。

「なんで遅刻になるのよ。まだ時間はあるじゃない」「
「俺は忙しいんだよ。朝からこりこりやらなきやならなことがあるんだ」「

「なによ?」「

「なつ、なんで教えなきやいけないんだよ。だ、だから俺は急いで
るんだよ」「

なんでこんなに動揺したんだろう?まあどうでもいいか。今はそれよ
りこの状況をどうするか、ね。

「とりあえずあたしも今日はいろいろあるから…………でもそれ
にはあんたもいなきやいけないのよ」「

「どうせ、また公園の掃除だろ?お前が趣味でしている。そして、
なぜか俺が強制的に手伝わせられる訳だ

ズバリ全て言い当てられてしまった。なにくそ、後藤のくせに。

「だつて今は秋でしょ。だからこの落ち葉を奇麗に掃除して、一力
所に集めて昨日実家のおじいちゃんに貰つた芋を焼こうと思つて。
食欲の秋つて言つし、やっぱ秋と言えば焼き芋でしょ。どうせなら
後藤くん誘つて、落ち葉拾い任せよー。どうせ暇でしょアイツ。ま
苗字が前木の私にとって、後藤なんて後ろつぽい名前の奴なんだか

ら、私に従えればいいのよ……なんて思つてないわよ別に「なにわざわざ『丁寧』に人の悪口大声で喋つてんの」あつ、いけない。つい思つたことを全部口に出しちゃうクセが。あつ、このままじゃ、可愛い女子高生が一人で寂しく焼きイモする図が完成しちゃう。ダメ、私みたいな可愛い女の子が一人で焼き芋とか。

「べ、別に……後藤くんなんて居なくともいいんだけどさ、どうせ暇でしょ？だから、仕方なく誘つてあげているんだから、大人しく誘いに乗りなさいよ」

逃がさないようにと首を絞めてやるいと飛びついた私を、ひょいと後藤くんは避けてしまつた。

あれ、いつもならこれで私がブイブイ言わせて後藤くんは渋りながらも「わかった」って言つてくれるのに……。

「いや、悪いんだけど今日はちょっと付き合えないんだよ」「なんですよ」

「ちょっととな。言つただろ放課後に用があるつて」

「放課後つては言つてないじゃない。朝つてしか言つてないわよ」と、言つている間に学校に着いてしまつた。後藤くん何があるんだろ？

「悪いけど用あるから『メンな。じゃーな。』

そう言つて後藤くんはちょっとと氣まずそうに走つて行つてしまつた。ねえ、それつてそんなに大事なことなの……。

放課後、学校が終わつても後藤くんは現れなかつた。『オカシイ』

。おかしいよ。

いつも一緒にいて、一緒に遊んで、一緒に……。

一人ぼつちで枯葉を集めて、火をつけて、アルミホイルに包んだイモをパチパチと音がする火の中に埋めた。

イモをパチパチと音がする火の中に埋めた。
つる登色のくはなソーリモニウナフ湯ニ

ゆれる橙色の火は沈んでいきそうな夕陽とよく似ていて、なんだかセンチメンタルな気分になつた。

膝を抱えて座り込んで、組んだ腕に首をつずめる。マフラーは去年
買った奴をどこかにやつてしまつて最近首元が寒い。

「あたしめでたまに、愛い子が一人で焼き芋しなきゃなんないのよ。なんでこんな惨めな気分で焼き芋しなきゃなんないのよ」

あぐびの両様で大きく伸ばした腕が何かに当たった。

「ナリナニ民ナニヤアヤシム」を振り返ると、御前ぐんは力の字はなくて寝ていた。

「はあ？ つたぐ
アゴに毛口入つたよ」

後藤くんは「二をさすりながら制服に着いた土を払いながら立ち上がった。

自業自得よ あたしの説いを聞かせるがためにやるのよ」「

そつぱみを向ひて、いたのこ、その視線の中、紙袋を突きだす。

「ばいじん」

「開けてみないとわかんないだろ？苦労したのにアッパーかよ」

取つて中を覗いた。

「なつ、なによこれ」

「お前、去年買ったマフラー無くしたって言ってただろ？だからちよつと手芸部のやつに教えてもらつて作つたんだよ。

かっ、勘違いすんなよ。べつ、別に意味とかないからな。お前今月誕生日だろ? いや、でも…… うう、これ誕生日プレゼントとかそ

んな……うわっ

紙袋から取り出した下手なマフラーを握つて、慌てている後藤くんをおもいっきり殴つた。

「えっ、なんで俺殴られ……」

「はい」

まだ、痛がつている後藤くんに焼き芋を差し出す。

「あんただけなんだから。こうやって焼き芋とかしてあげるの」「バー力、俺だってこんまワガママお前じゃなかつたら付合つてやんねえよ」

まだ夕陽は沈んでいない。これで私の顔が赤いのは誤魔化せるはず。でも、後藤くんが赤いのが私には分かるから……。

「交換ね。マフラーと焼き芋」

「だな。俺もそのために作つたんだし」

背後で焚き火の破裂音が響いた。私は座つている後藤くんに手を貸してやる。彼の手はとても暖かかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9539d/>

マフラーと交換

2011年1月3日07時28分発行